

私に池があります

マレーシア人の明るいリラックスした雰囲気と中国人のまじめさを合わせ持つフアド先生は、この一年間の日本滞在で更に彼の日本語力に磨きがかかると思うのだが、彼にも大きなウイークポイントがある。

それは発音である。

日本人の話すことなら九十パーセントは分かるといふのに、彼の言うことは時々聞き間違えられるといふのだ。

この間も「私にイケがあります」と言つたら相手の先生に「えつ?」と変な顔をされてしまったと、私の顔をじつとみつめる。私なら分かってくれるでしょうという風に。でも待つて下さい。フアド先生。

前後の文章がなければ、私にだつて分からぬいわ。「池がある?」「どこに?」「あなたに?」「まさか?」「あなたの家にという意味?」「フアド先生、申し訳ないけれど、私にも意味がよくわからないわ。イケつて、あの魚や蛙のいる池のこと?」

フアド先生の黒い瞳が失望の色をたたえている。陽気な彼も良いけれど、こんな表情も捨てがたい。彼、日本語の先生じゃなくて役者になれば良かつたのにと彼の感情にはおかまいなしに、がっくりと肩を落としているフアド先生をみつめ返す。

「イケは池ではなくて、オピニオンのこと、イケです」

「ああ、意見!分かったわ。先生に『私に意見があります』と言いたかったのね」

「そうです」

「池はますいわ、フアド先生、ますイケトイケンでは高低アクセントが逆だし、それにあなたはンを発音しなかつた。つまり二拍のことばを一拍で発音してしまつたのね」

「ああ、やはりそうでしたか。そんなことだろうとは思いましたけれど、とても惨めでしたよ。『エッ?』と言われた時には」

「そんなに気にしないで。私がもしその場にいたら、きっと先生のおつしやる意味が分かつたと思うわ。今までだつて間違えたことないでしょ?」

外国人の間違えやすい発音というのは、もちろんその人の母国語にもよるが、大体共通点はあるものだ。だから大抵の場合は聞いていてなんとか分かる。

でもフアド先生くらい日本語が出来て、こんなに大きなウイークポイント

を持った人も珍しい。きっと日本語を勉強する際「読む、書く、聞く」に重点を置きすぎ「話す」練習がたりなかつたのだ。それも効果的な練習法が。

彼の発音を徹底的に直したい。「マイ・フェア・レディ」のヒギンズ教授のように。イライザよりはファド先生の方が数段、頭が良いこと間違いないし。ポイントを決めて集中的にやれば目に見えて効果が現れるはずだ。私の中にひそんでいる「やりたくてたまらない虫」がまた眼をさましたとみえる。

その虫は、虫と言つても氣体のようなもので、何もない時は消えてしまつてその存在さえ分からぬのに、大きく膨れあがると、頭のてっぺんから爪先まで、血管の隅々にまで入りこみ、私に行動をおこさせてしまつたのだ。

私は子どもの頃から、この虫のためにどれほどたくさん行動をおこしたことか。十代や二十代の頃は氣体虫のふくれあがるのが急速すぎて失敗し、後で随分後悔もしたけれど、歳と共に膨れあがる速度が鈍ってきて、この頃ではこの虫にあまり迷惑をかけられることがない。むしろ時々は感謝したいくらいなのだ。

今日の氣体虫の膨れあがり方は異常に早い。やりたくてたまらない虫は、まず心臓をじきじきさせ、それから指の先をムズムズさせ、頭は素早く行動をおこす段取りを考えている。どうしよう。注意信号はどこにも鳴っていないし、このまま大空に向けて飛び立たせようか。

その時ファド先生がピストルを一發。

「先生、私も学生たちと発音のトレーニングしていただけますか。毎日三十分くらい、短時間で効果のあがる科学的メソッドで」

ふくらみすぎて、もう私の体の中におさまりきれなくなつていたやりたい虫は、ピストルの音に触発されて口からふわっと飛び立つた。

「いいわ、やりましょう。速効性のあるトレーニングをね」

やりたい虫の色は、私の眼にはよく見えなかつたけれど、燃えるように赤かつたみたいだ。

早速、準備にかかる。

短時間で効果のあがるトレーニングのために！

トレーニングA（高低）

まず日本語は高低アクセント、つまり一語の中に高く発音される部分が必ず一ヵ所はあるということを肌で理解させることである。

それも高低には型の種類がいくつあるから、それらはまとめて練習させ

ること。

教室には、子供用の鉄琴とピアノの上で埃をかぶっていたメトロノームを持ち込んだ。人が見たら、てっきり音楽の授業を始めるとと思ったかもしれない。

私が初めて英語を覚えた小学校の頃、母は楽しそうにフライパンをスプーンで叩き、強弱アクセントを教えてくれたものだ。

「ビューティフル」

ビューティフルのところで強くフライパンを叩くと鉄のフライパンは思つたよりいいボローンという音を出した。ティフルの弱いところはボアン、ボアンという音。日本人の英語の発音は平坦になり勝ちと言われるが、私の英語がどうにか平坦さを免れているのは、母の笑顔と、フライパンとスプーンのおかげだと思っている。

鉄琴とメトロノームなら、もうちょっと音楽的にできるかもしれない。英語やドイツ語に強弱を教えるリズム楽器が必要だとすれば、日本語では、高い音と低い音を出す、メロディーを奏てる楽器が必要だと考えたからだ。

メトロノームは拍感覚を数えるためのものである。拍は音節とも言われることがあるが、要するに日本語の中で一番小さい音の単位だ。タイは一拍、にはんは二拍、イギリスは四拍、スウェーデンは五拍、私達日本人は一拍を同じ長さで発音するから、メトロノームのカチッ、カチッという動きに合わせて発音すれば、効果的と考えたのだ。うまくいきますかどうか。

まず一拍の語からスタート。これは（高→低）か（低→高）の一種類しかない。

おグループ 高→低 低→高

黒板に一拍の音を持つ単語を書いた紙をはる。私が教室に楽器を持って入ってきた時から、学生たちは好奇心を抑えきれず、

「先生、今日は何の勉強ですか」

と聞いていたのだ。

「はい皆、黒板を見て下さい。赤い字は高い音で、黒い字は低い音」

コイ (恋)

カジ (火事)

アサ (朝)

カサ (傘)

高い音→低い音

メトロノームを動かし、鉄琴をたたきながら発音してみせる。これは面白そうと皆日々に真似る。マレーシア人は音楽感覚が良いとみてなかなかスムーズに発音する。

では次。

| | | |
|--------|---|-----------|
| クツ (靴) | ↓ | 低い音 → 高い音 |
| ココ、ソコ | | |
| アシ (足) | | |
| カキ (柿) | | |

学生たちに教えるのは標準語のアクセントだが、これが関西弁になると、高低が全く逆になる。もつともこの頃はテレビやラジオの影響で誰もが標準語を耳にしているから、改まって京都の友人などにたずねると、「アサ、朝でしょう」「あら、麻かしら」なんて、本人もこんがらがる。

これが日本語教師だと、こんがらがつたなんて言つていられない。私の友人で「……コトです」という文章を「……古都です」あるいは「琴です」のように低→高を高→低に教えてしまった先生がいる。特に発音指導したわけではないらしいが、何回も繰返し発音されれば、学生たつて自然に覚えてしまう。

そういうことです。
……ということは
あつ、トニーのことですか
話したいことがあります

学生たちが一様に間違えて発音するのを聞いて、頭がくらくらした覚えがある。気の毒に、逆の高低アクセントを覚えた留学生たちはそれが逆だということにも気がつかない。友人に問い合わせてみたら、意識的に指導している時は良いが、ふつと他の方に気をとられると高低が逆になつてしまふのだそうだ。

日本語教師は、そういう意味では標準語と方言のバイリンガルでなければならぬんだろう。

b グループ

二拍、四拍、五拍と拍数を増やしていく。日本人の名前や駅名、地名、日常使う言葉などなど。

ササキ、ハヤシ、ギンザ、キヨート
コーヒー、コバヤシ、シンパン

面白いことに、どんな単語でも、一拍目が低ければ次は高く、一拍目が高ければ次は低くなっている。このへんも学生たちに肌で覚えさせたいところだ。

アオモリ、ワカヤマ、カナガワ

このへんになると高低アクセントも少し込み入ってくる。せつかく、アオモリとオの部分を高く教えても、県をつけてアオモリケンとすると、青森の部分はフラットで県になつて音が下がるという風にアクセントが変わってしまう。この例は他にもたくさんあって、一つ並べて教える。

シナノトシナノガワ
トショトショシツ

自分でも高低の印をつけながら、自信ががくなつてくることがある。やはり頼るべきはアクセント辞典。

ピンク色、会議場、韓国製、芸術家のように、後にー色、ー場、ー製、ー家がつくようなことはおわりの部分がフラットになる傾向があるようだ。

それに対してシンブン社、ベンゴ士、シュツチヨウ費、などー社、ー士、ー費などがつくとおわりの部分は必ず下がる。

ここまで来ると学生たちもお手上げという感じだし、私も少々シンドクなつてくる。興味がなくなると、脳下垂体へのホルモンの分泌も減つて、記憶力も下がるとか。

次のトレーニングに移ろう。

トレーニングB (促音) (長音) (撥音)

切手とマッチを買って、家に帰つた。

この文章を学生たちに言わせると、例外なく次のようになつてしまふ。
キテとマチをカテ、イエにカエタ。

それも、変なところにストレスを置いて発音するので、余計わかりにくくなる。

つまる音「ツ」が日本語では他の音と同じ一拍の長さを持つのだといふことを、徹底的に覚えてもらわなさいには、この問題は解決しない。

「……さん、これなめてさらんなさい。すっぱいでしょ？」

「ええ、スペイです」

「違う。スペイではなくてスツパイ」

思わず手を四つ続けて叩く。

「ホームランを打った。続けて！」

「ホームランを打た」

「もう一度、打つた」

私が「歌」と「打つた」を発音すると、その違いは聞き分けられるのだが、学生たちが発音する段になると、思うように一拍あけてくれない。半拍くらいの感じで次のタの音が入り込んで来てしまう。これはアド先生についても同じである。

さあ、メトロノームの動きにあわせて練習しましょう。

打つた、取つた、拾つた、吸つた、行つた、買つた、立つた、洗つた
皆で声をはりあげて練習する。なかなか良い感じ、この分なら効果があがりそう。

次は「ン」の音。

これも外国人から見ると、同じ一拍とは認めがたい音のようで、「原因は何ですか」に対して「ケニンは」、「今月の予定は何ですか」に対して「コゲツの」となつてしまう。

さあ、今日は気分を変えて外でレッスンしよう。住宅街の中にぽつかり開いた空き地には柔らかい緑の雑草のじゅうたん、時は春、誰が通つても気にしないで、

「タンゴ、ダンゴ、タンボ、トンボ」

「トンボがトンデル、タンボにトンデル」

「アンナ、コンナ、ドンナ、ソンナ」

次は長音。

「これも間違えやすい音だ。イタリアの女子学生から「私サド好きです」と言われた時には思わず、あのサド公爵のサドかと思い、彼女の可愛らしい顔を見つめ返してしまったものだが、何のことではない「茶道」のことだった。

サドと茶道では、印象があまりに違うではありませんか。あまり紛らわしいことを言わないで下さいね。

おじさんとおじいさん、おばさんとおばあさん、このへんは、間違えられたら間違えられたで、喜ぶ人も出てきそうだが、長音も人並に一拍だということが、外国人はどうも解せないらしい。

「フットボールは何拍?」

「四拍です」

これがまず普通の外国人の答え方で、良くても五拍。「六拍です」というと「なぜ?」と怪訝な顔をされてしまう。促音も長音も無視されて可哀相に。でも音節に対する考え方方が違うのだから仕方ない。その上フットボールのような外来語は英語では一音節で発音される。開音節の日本語的発音に直された上に、促音や長音が入つては発音しづらいのは当然だろう。

トレーニングは始まつたばかり、まだ始まつたばかりで何とも言えないが、マレーシアの学生たちも練習に乗気のようだから、きっと成果があるだろう。

ファド先生の期待する科学的メソッドにはほど遠いかも知れないけれど、彼の発音は目に見えて上がっている。(五〇二六字)

佐々木瑞枝『留学生と見た日本語』(ちくま学芸文庫、一九九五年)による